



# 国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター NewsLetter No.4

2003年4月30日発行

## サンゴ礁おとぎ話

### 4. 魚の畑仕事

土屋 誠

琉球大学理学部海洋自然科学科

サンゴ礁で泳いでいる時、黒っぽい魚が私たちがをにらんでいるように感じたことはありませんか？その魚は時時攻撃を仕掛けてくることがあります。私たちが魚の「なわばり」の中に入ってしまったので怒っているのです。家の中に他人が勝手に入ってくれば不愉快になるのは当然ですね。

タイのシャム湾のサンゴ礁でスズメダイの一種のなわばりを観察していたときの事です。近くにガンガゼがたくさんいたので一匹つまんでなわばりの中に入れてみました。スズメダイは直ちにガンガゼに寄ってきてガンガゼの「とげ」をポキポキ折り始めました（写真1）。痛いのでしょうか、ガンガゼは逃げていってしまいました。このサンゴ礁はガンガゼがとても多いことで知られているのですが、スズメダイのなわばりの中には一匹もいません。スズメダイの攻撃で追い払われているに違いありません。

ガンガゼも草食性で海藻が大好きですから、スズメダイのなわばりの中の美味しそうな海藻をねらっていると思われます。試しに網でスズメダイを除去して見ました。すると周辺にいたガンガゼが何匹かなわばりの中に入り込み、素早く歩いてスズメダイが栽培した海藻を食べていきました。その後にはガンガゼの糞の塊がたくさん見つかります。よほど美味しい食事でありついたのでしょう。



写真1：なわばりの中に入り込んだガンガゼを追い出そうとしているスズメダイの一種。

写真2：枝状ミドリイシの中の白と黒のしま模様で目立つ魚がミスジリュウキュウスズメダイ。

なわばりは海藻の畑を作るためだけにあるものではありません。この中で繁殖活動も行われます。でも不思議なことがあります。繁殖活動をするためには雌雄が出会わなければなりません。なわばりの中には一匹のスズメダイが棲んでいるのですが、このスズメダイはなわばりに入ってくるものは同種であっても他種であっても追い払おうとします。どうするのでしょうか。安心して下さい。繁殖活動は特別のようです。繁殖期には、雌が雄のなわばりを訪れて岩陰に産卵し、急いで自分のなわばりに戻るということが知られています。産み付けられた卵は雄によって受精が完了し、雄によって守られることになります。

ミスジリュウキュウスズメダイ（写真2）はクマノミ類と並んでサンゴ礁で最も普通に見かけるスズメダイの仲間です。私たちが近づいていくと素早くサンゴの枝の間に隠れてしまいますね。小さなサンゴには雌雄1個体ずつ棲んでいます。大きなサンゴには複数個体棲んでいます。1個体が雄で他の個体は雌です。もっと大きなサンゴになると雄の数も増えるようです。その場合はそれぞれの雄が小さななわばりを作ります。

サンゴ礁にはなわばりを持たない魚も多いのですが、なぜこれらのスズメダイたちはなわばりをつくるのでしょうか。なわばりの大きさ（＝畑の広さ）はどのように決まるのでしょうか？広い方がより多くの海藻を栽培できますが、あまり広いと見張りが出来ません。十分な食料が確保出来る範囲で狭い方が効率がよいと言えます。魚たちはなわばりを守るために労力を使わなければなりません。また侵入者のことを考えると遠くまで餌を取りに行くことも出来ません。ある魚にとってどのような作戦をとることが最も労力がかからないか、あるいはより多くの子孫を残すことが出来るか、などについて考えた（？）末の行動かも知れませんね。





# 石西礁湖における海水流動構造および濁質・淡水・熱輸送構造に関する現地観測

三井 順

東京工業大学大学院情報理工学研究所 灘岡研究室

〇はじめに

石西礁湖は、石垣島と西表島の間広がる、東西約20km、南北約15kmに及ぶ海域の呼称で、日本最大のサンゴ礁です(図1)。沖縄・琉球列島のサンゴ礁は、近年、様々な原因によって生態系への被害が大きくなってきています。例をいくつか挙げると、オニヒトデというサンゴの天敵が大量発生して、その海域のサンゴを食い尽くしてしまい、大きな問題となっています。また、もうひとつ大きな問題として、赤土問題というものがあります。赤土というのは沖縄の特徴的な土壌で、非常に粒子が細かいという性質があります。この性質のために、雨が降ったときに農地などから流れ出した赤土が沈砂池で沈まずに、そのまま海に流れ込みます。そして、サンゴの上に赤土が堆積するとサンゴは目詰まりを起こして死んでしまいます。さらに、海水温の上昇もサンゴにとって大きな問題で、共生している褐虫藻という藻類が高水温になると抜け出してしまうため、サンゴが真っ白になり(白化といいます)、やがては死んでしまいます。

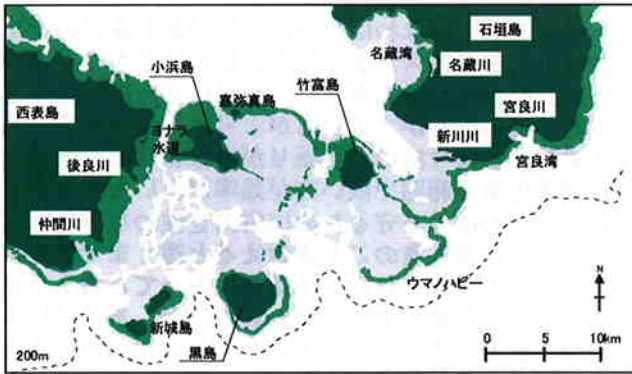


図1 石西礁湖とその周辺

このように、沖縄のサンゴ礁は様々な危機にさらされているわけですが、その中において、石西礁湖のサンゴ礁はサンゴがまとまった規模で生息していて、琉球列島の他のサンゴ礁に対するサンゴ幼生の供給源としての役割も期待されていることから、その適切な保全のあり方を探ることが現在重要な課題となっています。

これまでも石西礁湖では、サンゴ被度などの生物調査についてはかなり行われてきていましたが、海水流動場や濁度、塩分、水温などの物理環境についてはまだよくわかっていませんでした。海水流動場はオニヒトデの幼生やサンゴの幼生、赤土、さらに熱の輸送を支配しているという意味で非常に重要です。また、塩分を測ることで河川からの淡水がどのように石西礁湖の中に広がることがわかり、同時に濁度を測れば、赤土の広がる様子がわかります。

そこで私達は、この後に述べるような大規模な現地観測を行うことで、海水流動場の特性を明らかにするとともに、周辺の陸域から流入する濁質や淡水の動態や、石西礁湖内の水温環境特性を解明することを試みました。

〇調査期間

現地観測は2002年10月上旬から12月上旬までの約2ヵ月間行いました。

〇調査内容

海水流動場の観測とともに、海水流動の機構の解析に必要な水位・波浪の観測を行い、さらに濁質・淡水・熱輸送特性を把握するために濁度・塩分・水温の連続観測を行いました。これらは主に図2、図3のようにブイを海底に係留して、そこに観測機器を設置しました。また、河川からの出水を捕らえるために、石西礁湖付近の5河川の河口域で水位・濁度を測定するとともに、それぞれの河川流域の代表的な地点で降水量を測定しました。また、風向風速および日射量を測定しました(図4)。

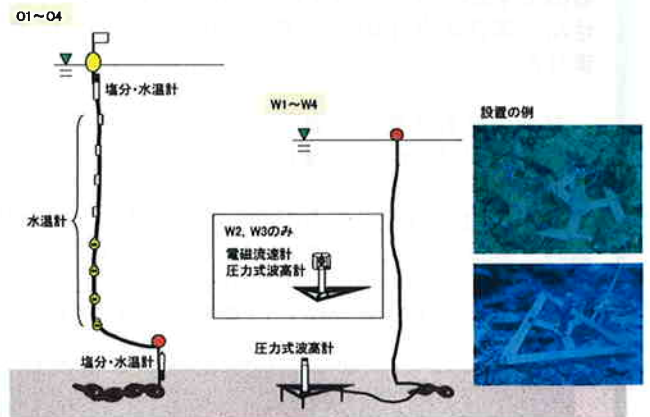


図2 測器設置方法 (外洋)

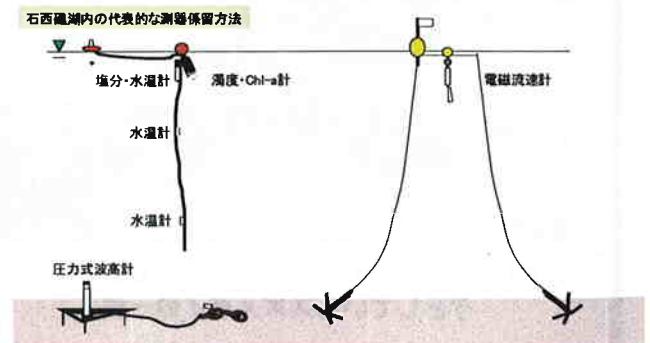


図3 測器設置方法 (石西礁湖内)



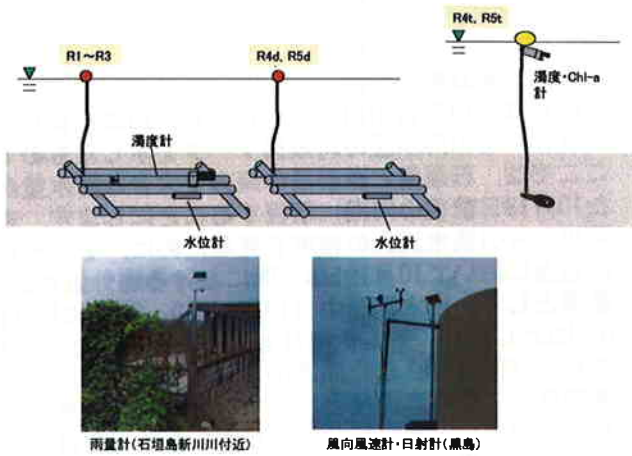


図4 測器設置方法 (河川・陸上)

○調査地点

図5に示すように石西礁湖内およびその周辺部24地点、河川内および河口部7地点、風速・日射計測1地点、雨量計測5地点を調査地点としました。そのうち、石西礁湖内・周辺ではブイ係留による海水流動観測を13地点、水位および波浪観測を10地点、表層濁度観測を11地点、表層塩分観測を15地点、水温観測を15地点で行いました。各地点の観測項目と水深は表1のようになります。

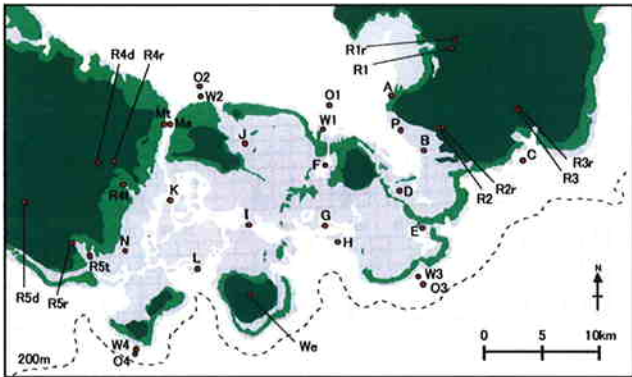


図5 観測地点

地点名	水深(m)	観測項目
A	4.8	流速・濁度・塩分・水温
B	7.4	流速・濁度・塩分・水温
C	12.8	流速・濁度・塩分・水温
D	9	流速・波高・濁度・塩分・水温
E	12.8	流速・波高・濁度・塩分・水温
F	16	流速・濁度・塩分・水温
G	17	波高
H	25.6	流速・塩分・水温
I	15	流速・濁度・塩分・水温
J	5.5	流速・波高・濁度・塩分・水温
K	13.8	流速・波高・濁度・塩分・水温
L	26	流速・塩分・水温
M-a	24.5	流速鉛直プロファイル・水温
M-t	12	流速・濁度・塩分・水温
N	16	流速・波高・濁度・塩分・水温
P	6	流速・濁度・塩分・水温
O1	50	塩分・水温
O2	51	塩分・水温
O3	49	塩分・水温
O4	49	塩分・水温
W1	13.7	波高
W2	12	波高
W3	14.5	波高
W4	15	波高

表1 観測地点の水深と観測項目

○結果

・海水流動構造

全観測期間における、5分間平均した表層流速値のu-vプロット(流速の東西成分をX軸、南北成分をY軸にとって散布図で表したものを)を描くと図6のようになります。M t地点(ヨナラ水道)やE地点(ウマノハピー北)はリーフや陸にはさまれた水路となっており、最大流速はそれぞれ110cm/s、80cm/sを超える速い流れとなっていることがわかります。I地点(黒島北)では周りには陸やリーフがありませんが、ここも速い流れの水路となっており、最大流速は100cm/sを超えています。全体的に流速変動の変動幅、主軸方向ともに場所によって大きく異なっており、このことから、この海域は潮流(潮の干満に伴って生じる海水の流動)が卓越する場であることや、局所的な地形効果がかかなり大きく現れることがわかります。

潮流について詳しく調べてみるための方法として、調和解析というものがあります。潮汐はいくつかの異なる周期をもった成分(分潮)に分けることができ、その分潮の振幅と位相が求まれば、潮汐を予測計算することができます。調和解析とは、観測データから各分潮の振幅と位相を求めることをいい、潮流についても潮汐と同じように調和解析を行うことができます。各地点で測定した流速について調和解析を行い、主要な4つの分潮の潮流成分を求めた結果、全ての地点でM2分潮(周期12.42時間)が卓越していることがわかりました。そのM2分潮の潮流楕円(潮流の流速をある1点からのベクトルで表し、その先端を線で結んだもの)を描くと図7、図8のようになります。ほとんどの地点で主軸方向がはっきりしたパターンとなっていることがわかります。また、全体的に満潮時に北向き、干潮時に南向きの流れとなっていることがわかります。しかし、例えばE地点(ウマノハピー北)では、干潮から上げ潮にかけて西へ流れ、満潮から下げ潮にかけて東へ流れています。このように、潮流の位相も場所によってはかなり異なっており、この海域での潮汐に対する局所的な地形効果の大きさがわかります。

次に、全観測期間で平均した表層流速をベクトルで表すと図9のようになります。観測期間中の風は北東風が卓越しており、これにより全体的に西へ向かう吹送流(風による流れ)が生じていたものと考えられます。

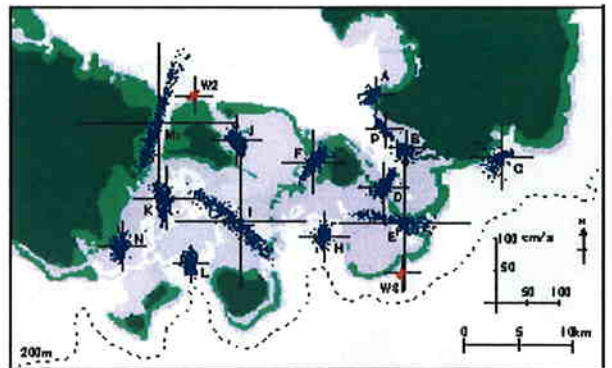


図6 全期間における表層流速(5分間平均値)のu-vプロット

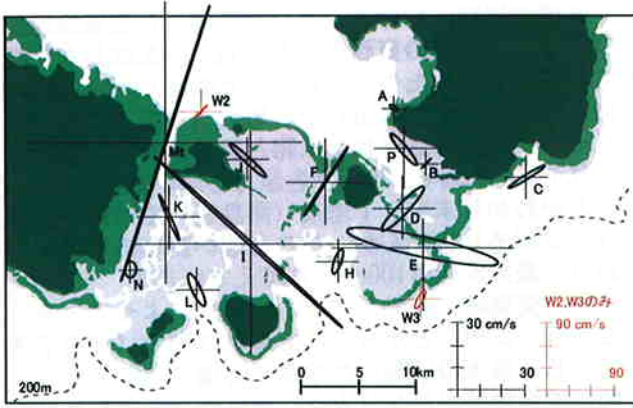


図7 潮流楕円 (M2分潮) の空間分布

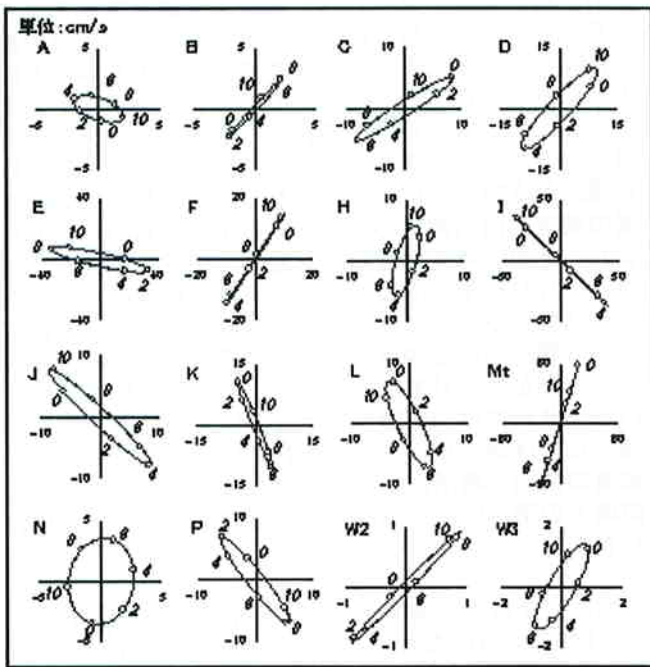


図8 潮流楕円 (M2分潮) 車体数字は石垣港での満潮時刻からの遅れを表す

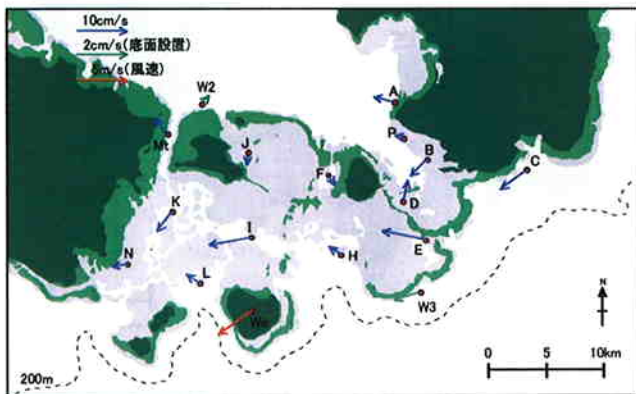


図9 全期間の平均層流速ベクトル

・淡水、濁質輸送特性

図10は石垣島新川川流域 (R2), 西表島後良川流域 (R4) での降水量の時系列データを示したものです。ここでは、石垣島と西表島の両方で大きな降水量があった10月19日前後の時期に着目することにします。まず、河川からの淡水流入の程度を見るために、それぞれの観測地点において10月19日0:00における塩分値を出水前の基準として、出水期間中 (10月19日0:00~10月21日0:00とした) に最も低塩分となった時の値との差を求めました (図11)。また濁度についても同様に、出水前の基準値と、最も高濁度となったときの値との差を求めました (図12)。最も塩分低下が著しかったのは、N地点 (西表島南東) で、10.6psuの低下量でした。ついでC地点 (宮良湾南) の6.0psu, A地点 (名蔵湾南) の4.1psu, B地点 (新川川河口) の2.8psuでした。一方、最も濁度上昇が著しかったのはC地点で (17.6ppm), ついでA地点 (16.2ppm), B地点 (5.1ppm), N地点 (4.8ppm), J地点 (1.9ppm), Mt地点 (1.5ppm) の順で、その他の地点で上昇量は1ppm以下でした。このように、出水時の顕著な濁度上昇は小浜島周辺を除くと比較的沿岸域に限られること、また、西表島に比べて、石垣島からの赤土流入の割合が大きいことがわかります。

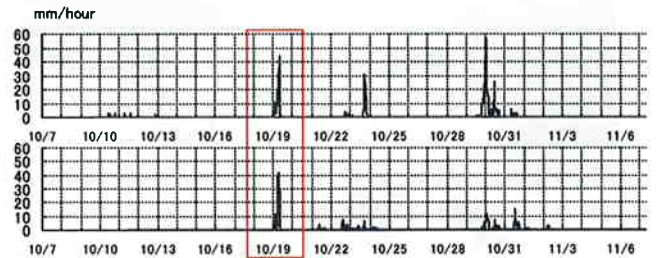


図10 降水量 上: 石垣島新川川流域 (R2 r) 下: 西表島後良川流域 (R4 r)

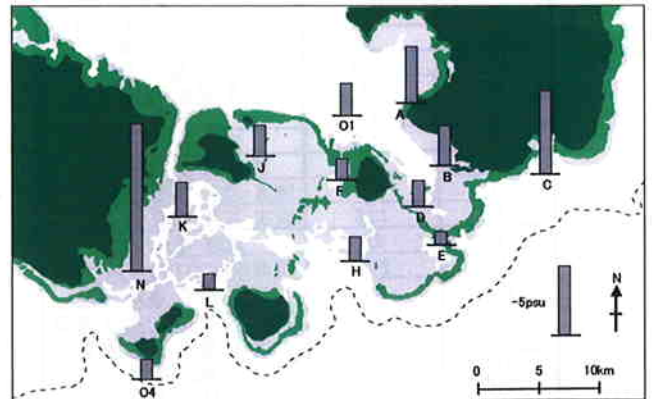


図11 出水時 (10/19) の塩分低下量



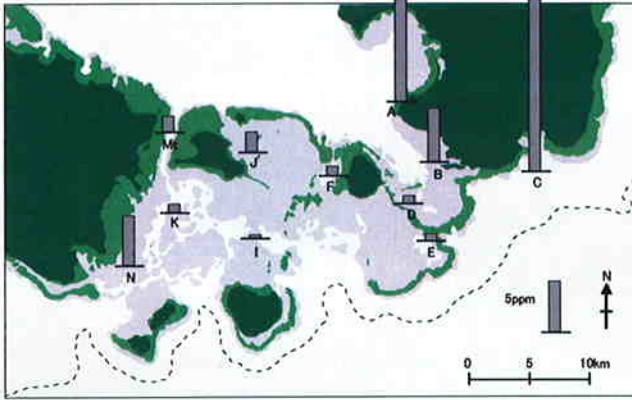


図12 出水時 (10/19) の濁度上昇量

・水温特性

平常時における基本的な水温特性を見るために、晴天微風時の典型的な表層水温の一日間平均値と変動幅を算出しました(図13)。O1地点(北東側外洋)、O4地点(南西側外洋)では、比較的高水温で変動幅が小さく、その傾向は全観測期間を通じて見られます。また、C(宮良湾南)、H(黒島北東)、L地点(黒島北西)のような外洋に近い場所でも同じ傾向が見られます。水温の時系列変化を見ると、その傾向はいくつかのグループに分けることができます。外洋のO1、O4地点では水温変動は小さく、全観測期間を通してなだらかに低下していました。C、H、L地点は、外洋と似た傾向が見られます。それに対して、A(名蔵湾南)、J(小浜島東)N(西表島南東)地点では、数日スケールの水温変動が大きく、全体的に低水温でした。この数日スケールの水温変動は気温の変動と対応しており(図14)、このことからA、J、N地点のような水深が浅く、あるいは外洋との海水交換が少ないところでは、気象擾乱に対する低温化応答幅が大きく、日平均水温はより低くなることが考えられます。また、M(ヨナラ水道)、E(ウマノハピー北)、I(黒島北)地点のような水路となっている地点では、潮汐周期での水温変動がかなり大きく現れることがわかりました。これは、外洋側と石西礁湖内の両者をつなぐ水路の水温を比較すると明らかであるように(図15)、この時期に石西礁湖内と外洋側の間で水温に明確なコントラストがあることから、両社の水塊をつなぐ水路部で、潮汐による周期的な水平移流効果が現れたことによります。

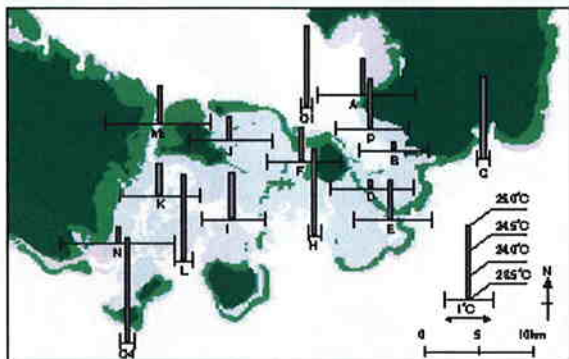


図13 晴天微風時における表層水温の1日間平均値と変動幅

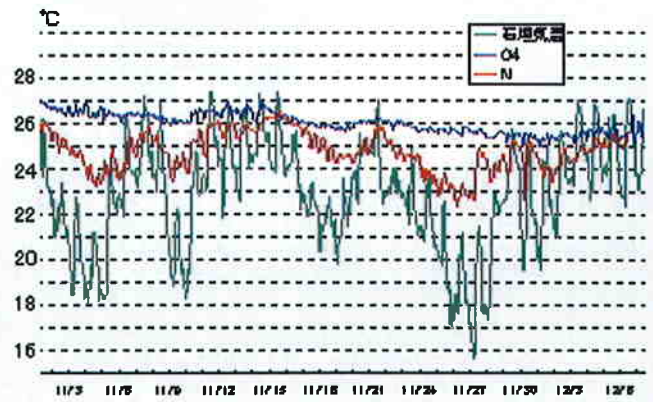


図14 表層水温の時系列変化①

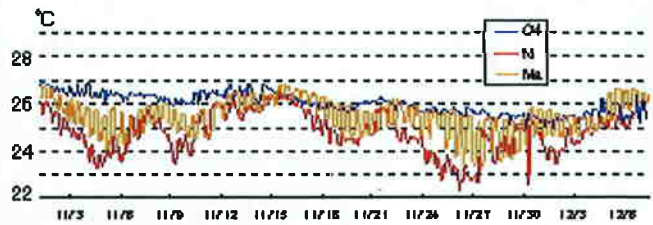


図15 表層水温の時系列変化②

○まとめ

2002年10月上旬から12月上旬までの約2ヵ月間にわたって行った今回の観測では、①石西礁湖内の流動構造、②出水時における淡水・濁質の分布特性、③水温変動特性の解明を試みました。主要な結論を以下にまとめます。

- ① 石西礁湖内の流動場は、潮流が卓越する場であり、陸やリーフなどの複雑な地形により流速の主軸方向や変動幅、潮流の位相が場所により大きく異なる。
- ② 河川出水の影響は、小浜島を除くと、石垣島および西表島の河口付近の地点に限られていた。また、出水時における沿岸部での濁度上昇量は、石垣側の方が西表側より顕著で、石垣島からの赤土流入の割合が大きかった。
- ③ この時期の水温の特徴として、石西礁湖内では外洋側に比べて水温が低く、特に水深が浅い場所や外洋との海水交換が少ない地点では、数日スケールの気象擾乱に対する低温化応答幅が大きくなる。そして、外洋の暖かい水塊と石西礁湖内の冷たい水塊をつなぐ水路周辺では、水平移流効果による潮汐周期の水温変動が顕著に表れる。

今回の観測は、秋から冬にかけての冷却気にあたる時期に行いました。梅雨を含む春から夏にかけて加熱期での観測も行う必要があるため、さらに2003年5月上旬から7月上旬にかけて同様の観測を行いました。その結果は現在解析中です。また、今後は数値シミュレーションによる流動場の再現を目指す予定です。





## 子どもパークレンジャーの平成15年度活動報告

自然保護官 鈴木祥之

平成15年度の子どもパークレンジャー事業では石垣市立白保小学校と連携して5、6年生44名の子どもたちと1年間サンゴ礁の海をテーマに活動しました。白保を拠点としてサンゴ礁の保全活動を行っているWWFしらはサンゴ村と協力して、全6回の取り組みを行いましたので、その活動を紹介します。

### 第1回「サンゴってなんだろう」

第1回目ということで一年間一緒に活動していくスタッフと子どもたちの初顔合わせです。お互いちょっと緊張しながら、サンゴとはどういう生き物かを学ぶプログラムを体育館で実施しました。色々なサンゴの骨格を見比べながら特徴を学んだり、手をつないで輪になって白保の海で一番のマイクロアトールの大きさを実感しました。



何百年も生きている巨大なマイクロアトールの上で。もしかしたら、みんなのオジイのそのまたオジイもこのサンゴの上で一休みしたのかもしれないね。

### 第2回目「ワタンジウォーク」

白保の海で潮が引くとリーフの先端まで歩ける干潟「ワタンジ」が現れます。そのワタンジでウォークラリー形式に干潟の生き物や潮の満ち引きなどについて学びました。自分たちが住んでいるすぐ目の前の海なのに、ワタンジに行ったことのない子どもが多く、クモヒトデやナマコ、イソギンチャクなどの生き物を興味深く観察したりおそろおそろ触ったりしていました。やんちゃな子どもたちばかりなので、ふざけあってすぐにびしょ濡れになる子がいて、そのうちみんな潮だまりで泳ぎだしてしまっ。みんなあんまり海で泳いで遊んだりしないからとても楽しかったみたいです。

### 第3回「水の生き物になろう」

7月初めにサンゴ礁でスノーケリングをするために、市営プールでスノーケリングの練習を行いました。人が水の世界にでかけるにはどうしたらいいのか？、イルカの身体の特徴を参考にスノーケル器材の特徴とその正しい使い方を学びました。徐々にプールで練習していくとみんなとても上達が早い！。ほとんどの子がスノーケルクリアなどの基本動作をマスターしました。



潮が引いたワタンジで生きもの探し。不思議な生き物を見つけたようです。



#### 第6回「南波照間島会議」

架空の島、南波照間島を舞台にその島の将来の開発計画について、住民、観光業者、レンジャーの立場に分かれて話し合いました。これは相手の立場を考慮して、人の話をよく聞き、自分の意見を述べるという話し合いから一つの案を作ることを第一の目的として実施しました。

多くの子どもたちが自分たちの身近な海がどういうところなのか知らないかったですが、1年間通して活動を行うことで子どもたちはサンゴやサンゴ礁の生き物、また海と人とのつながりを総合的、体験的に学べたと思います。子ども達には目の前に広がる美しく豊かな海を大切に誇りに思う心が育まれていると感じました。

白保の海にはたくさんの不思議が詰まっています。ただいま観察中の魚もどうしてこんなに鮮やかなものと地味なものがあるのだろう？

#### 第4回「サンゴ礁でスノーケリング」

いよいよ、実際に海でスノーケリングです。最初に海の危険生物やスノーケルのマナーを講師から聞いたあとグループ毎に船に乗り込み出発です。まずは最初回目みんなで手をつないで輪を作った白保で一番大きなサンゴのマイクロアトールの上にみんなで立ちました。みんなその大きさに驚き、ここまで大きくなるのに500年以上もかかっていることを目の当たりにしました。子どもたちは最初はおっかなびっくりと泳ぎ始めましたが、すぐにいろいろなサンゴや生き物たちに興味をもってすいすいと自由にスノーケリングを楽しんでました。このあと各自でそれぞれお気に入りの生き物を見つけて、動きや生態をよく観察してそれを水中ノートにスケッチしました。

午後からはスケッチした生き物をきれいに書き直しておおきなサンゴ礁の絵のなかに貼り付け、生き物たちの多様さやつながりを学びました。

#### 第5回「調べ学習のテーマ探し」

総合学習の時間を使って、今までサンゴ礁について学んだことから自分たちの興味がある内容について、グループ毎に分かれて自分たちで調べてました。内容は様々でサンゴの生態的なこと、イノエの様子のこと、地元のおじいたちが獲る魚のこと、サンゴの石を使って模様を出す染め物のことなど、様々なテーマに分かれて調べ学習を進めました。そしてその調べたことは、学芸会でポスター発表を行いました。



南波照間島について、みんなで話し合いをしているところ。



## 平成15年度八重山地域での オニヒトデ調査・駆除活動報告

上野光弘

国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター

去る平成16年2月3日から11日にかけて、平成15年度環境省事業のオニヒトデ調査・駆除活動が八重山漁業協同組合によって行われました。これは、平成15年7~8月に行われたオニヒトデモニタリング調査及び10月の一斉駆除に続くものです。なお、第3号ニュースレターでの報告以降、10月22日八重山環境ネットワーク、2月12日八重山漁業協同組合によるボランティア駆除も実施されました。また、例年環境省で実施されている西表国立公園石西礁湖及び近隣海域におけるサンゴ礁モニタリング調査中目撃したオニヒトデが駆除されました。これらの結果も併せて報告致します。

まず、本年2月3日~12日の活動結果ですが、オニヒトデ急増海域であることが判明した竹富島南、マルグー周辺、カナラグチ周辺、ユイサーグチ周辺、スーハヤグチ周辺を対象としました。モニタリング調査結果を図1、駆除結果を図2に示します。どの海域でも15分間遊泳中のオニヒトデ目撃数は、前回7~8月調査時よりも増加しました。特に、カナラグチ周辺、竹富島南ではその目撃数が10匹を超えていました。写真1はカナラグチ周辺の海中景観なのですが、写真中3匹のオニヒトデが隠れています。このように局所的に集まって分布していました。駆除は8日間述べ91人が従事し、1544匹のオニヒトデを駆除しました。1日あたりの駆除数は平均すると200匹前後となり、前回10月時よりも倍増しています。写真2はカナラグチ周辺での駆除活動風景です。風呂桶があふれるほど多量のオニヒトデが捕獲されています。

今回駆除されたオニヒトデの特徴は、昨年1~4月駆除時や前回10月駆除時に比べ5~20cmの小型個体が多数含まれていたことです（竹富島南では21.1%、マルグー周辺では33.6%、カナラグチ周辺では35.6%、ユイサーグチ周辺では2.8%、スーハヤグチ周辺では5.9%）。これらオニヒトデ急増海域では度重なる駆除にもかかわらず、なかなか効果が見えてきません。オニヒトデ増加の勢いは想像以上のようです。

まだ、オニヒトデの食害によってサンゴ類被度が著しく減少している海域はありませんが、それも時間の問題かもしれません。昨年10月に実施された西表国立公園石西礁湖及び近隣海域におけるサンゴ礁モニタリング調査や、地域の方から寄せられるオニヒトデ目撃情報によると、これまでオニヒトデが目撃されなかった場所でも見つかるようになってきました。オニヒトデが増加しているのは一斉駆除の対象地域のみならず、石垣島及び西表島周辺を含めた全域的な傾向のようです。

さて、八重山地域で本格的なオニヒトデのモニタリング調査・駆除が始まって、1年が経過しました。これまで駆除されたオニヒトデは4154匹を数え、もはやオニヒト

デの大発生とみなせるような状態とと思われます。なかでも、マルグー周辺では858匹、竹富島南では1414匹、カナラグチ周辺では799匹と、これら3海域で3000匹を超えています。これら海域は石西礁湖の主要な水路部にあたり、ここでオニヒトデが大量発生すると、石西礁湖全域でのオニヒトデの大幅な増加が危惧されます。オニヒトデの大発生による壊滅的な被害から石西礁湖及び周辺海域のサンゴ礁を守るため、環境省国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターでは、地域関係機関と協力して最重要保全地域の選定作業を進めています。そして今後も、オニヒトデ急増海域での予防的駆除を行うことによって増加の状態を把握するとともに、広い海域でのモニタリング調査を実施してオニヒトデの全域的な動向を監視していく予定です。



写真1：よく探すと3匹オニヒトデが隠れています。



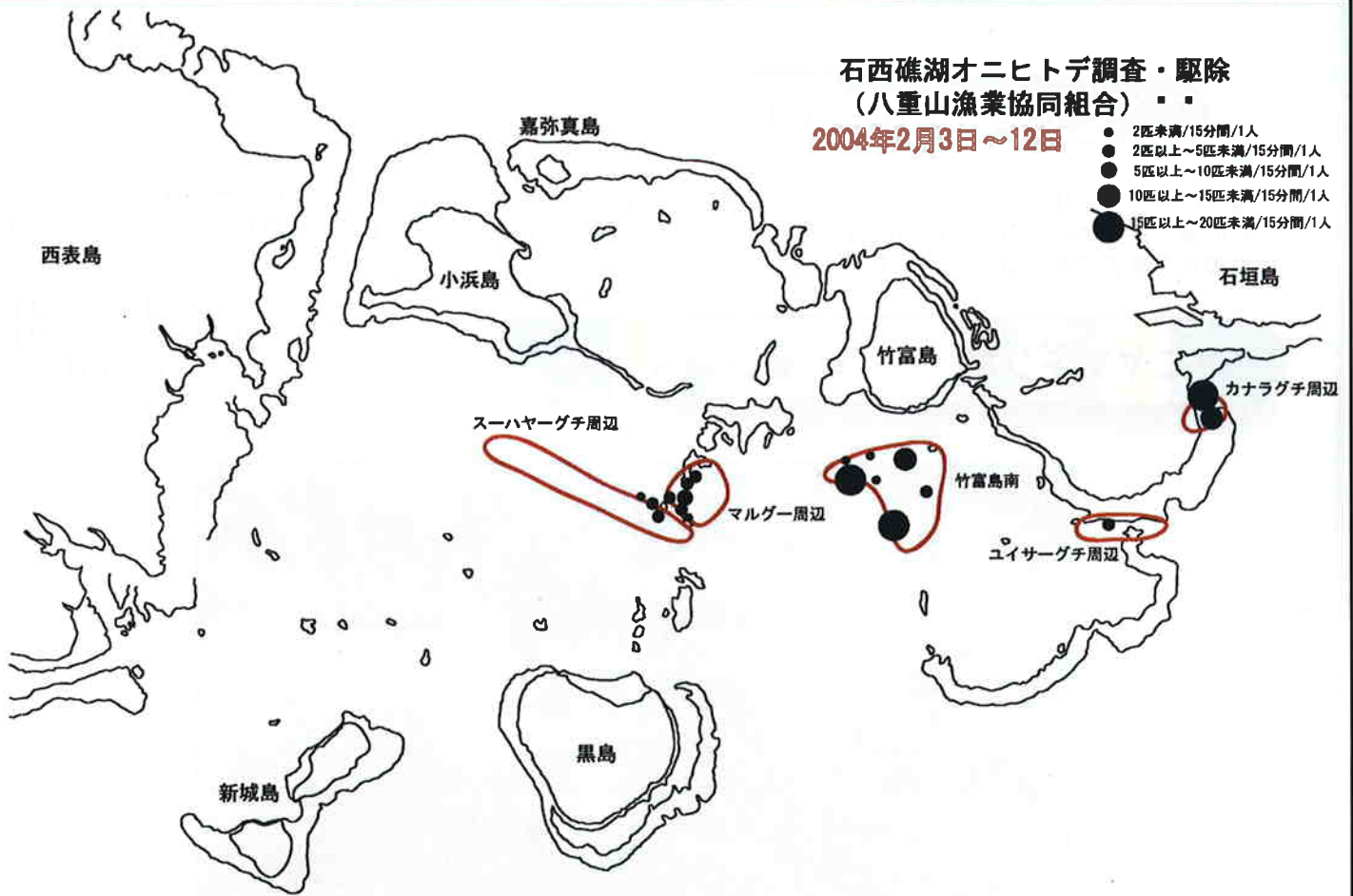
写真2：船上にて駆除したオニヒトデを浴槽に移す地元ウミンチュ。



石西礁湖オニヒトデ調査・駆除  
(八重山漁業協同組合)

2004年2月3日～12日

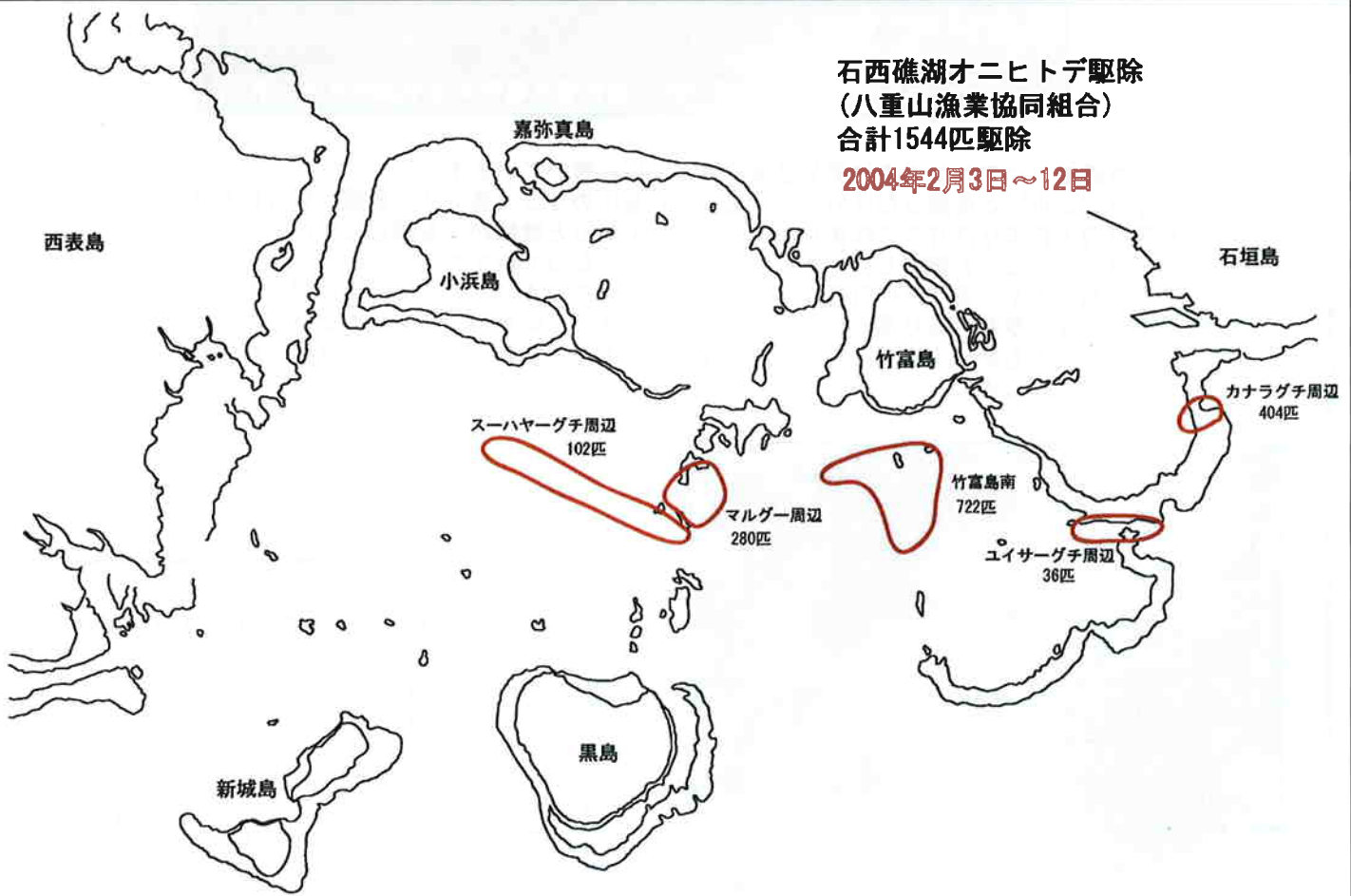
- 2匹未満/15分間/1人
- 2匹以上～5匹未満/15分間/1人
- 5匹以上～10匹未満/15分間/1人
- 10匹以上～15匹未満/15分間/1人
- 15匹以上～20匹未満/15分間/1人



石西礁湖オニヒトデ駆除  
(八重山漁業協同組合)

合計1544匹駆除

2004年2月3日～12日





## 真栄里の生きものたち ②

夏にはスノーケリング教室も行う国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターのすぐ東に広がる真栄里（まえさと）の海。市街地の目の前にあるにもかかわらず、この海にはさまざまな生きものが生息しています。ここは真栄里の生き物を紹介するページです。

### ヤエヤマギンポ

学名：*Salarias fasciatus*

撮影地：真栄里礁池内  
撮影日：2002年8月24日  
撮影者：濱崎克哉



撮影者を観察するヤエヤマギンポ。

浅いサンゴ礁域、ハマサンゴの仲間や岩礁に好んで住み着いています。

‘ヤエヤマギンポ’と名乗るだけのことはあり、八重山のサンゴ礁では、普通に見られる魚です。一見地味なのであまり注目をされませんが、よくよく見ると愛嬌がある顔をしています。

いつも海底にちょこんと鎮座し、大きな目で辺りをうかがっています。

動くのが億劫なのか、逃げ足の自信があるのか、ヒトがゆっくり、そっと近づけば、かなり近寄ることができます。写真も撮り易い魚です。慣れるとカメラに向かってモデルのようにキメポーズを取ってくれることもあります。こちらの勝手な思い込みかもしれませんが、そういう時は魚と心が通じたような気がします。



隠れ家からあたりの様子をうかがうヤエヤマギンポ。腹鰭で体を支えているのがわかる。

環境省国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター

〒907-0011  
沖縄県石垣市八島町2-27

Tel: 0980-82-4902  
Fax: 0980-82-0279  
URL: <http://www.coremoc.go.jp/>  
Email: [okironc@coremoc.go.jp](mailto:okironc@coremoc.go.jp)

開館時間：9：00～17：00（平日）  
休館日：土日祝日・年末年始

